

# 山椒は小粒でも…

Vol.18

## ぶらじる丸とガリバー



みなさんは佐田浜にあったぶらじる丸を憶えていますか？かつて日本とブラジルを行き来する移民船として活躍したあのぶらじる丸です。第二の人生として、海上パビリオンになり、鳥羽の駅前にごんと構えていました。

ブラジルへの移民船としての展示はもちろんのこと、レストランや土産店などがあり、一時は鳥羽水族館やミキモト真珠島と並んで、海沿いの人気施設でした。オープン当時高校生だった私も、先着何名様というTシャツ欲しさに朝早くから友達と行列を作ったものです。大きさは約1万トンで、1974年に鳥羽へ来てから1996年に中国の上海へ

えい航されていくまで、設置されたのは現在の鳥羽マルシェの前の海です。当時は「海が見えなくなる」などといった景観論争もあったそうですが、ある種このまちの顔でもありました。



鳥羽ぶらじる丸(当時の観光パンフレットより)



ライトアップして幻想的に撮られたガリバー(デパートの屋上の遊具など、面白いものを探して撮り歩くフォトグラファー)キトウフジオさんの写真をお借りました

そして写真の右側、ぶらじる丸の後尾に座っているのが見えるでしょうか。そうです、市民の森公園にいる高さ6メートル幅12メートルもある、子どもたちに人気の遊具ガリバーです。ガリバーはかつてぶらじる丸の甲板にいたのです。見方によつては少々キモカワイイといわれるこのガリバー、右腕がすべり台になっていて、幼い子どもたちには大人気。ぶらじる丸の前にも和歌山県の公園

園で利用されていたとのことなので、今や第三の人生を謳歌しています。

そしてこのたびうれしいニュースが。鳥羽ロータリークラブさんが創立55周年を記念して、少々色あせたガリバーに化粧直しをしてくれるのだそうです。鳥羽の子どもたちの「ミニユニバーシヨンの場として、再構築したい」とのことです。

今やガリバーで遊んでいた子どもたちが親世代となつているので、その両方の世代の交流の場としてさらに魅力アップすることでしょう。

ちなみに、ぶらじる丸のその後は、解体のために一旦上海へえい航されていきましたが、それから広東省湛江市で海上パビリオンとして、こちらも第三の人生を謳歌しているそうです。まさに「リノベーション」ですね！

### 北海道への思い



Vol.175

市民課人権・生活係 ☎ 1126

みなさんは松阪市出身で幕末から明治にかけて活躍した探検家松浦武四郎という人物をご存じでしょうか。北海道の名付け親と言ったほうが分かるかもしれません。

全国各地を巡り歩く武四郎は長崎にいたころ、ロシアが蝦夷地(今の北海道)を狙っているのではないかという話に日本の前途を危惧しました。そこで、まだくわしいことが分らなかった蝦夷地を調査して、日本の北の地域がどんなところであるのか多くの人々に伝えようとして心を決めたのです。

武四郎は1845年、28歳で初めて蝦夷地に渡りました。41歳になるまでの間に6度行われた調査の記録は、すべて合わせると15冊になります。

現地ではアイヌの人々に案内を依頼し、アイヌ民族との交

流を深めながらアイヌ文化の理解に努め、アイヌ語も積極的に学びました。

この調査を通して蝦夷地を支配する松前藩の圧政や、豊富な海産物に目を付けた商人たちによってアイヌ民族が置かれている過酷な状況を知ります。そして、武四郎は調査報告書で幕府に対し、アイヌ民族の命や文化を救うべきであると訴えています。

また、蝦夷地の調査記録を出版するだけでなく、広く親しんでもらえるよう挿絵入りの本を次々に出版します。地域ごとにまとめられた紀行本を読むことで、蝦夷地の地理や動植物、アイヌ民族の文化を細かく知ることができました。

時代は明治へと移り、1869年「蝦夷地」に代わる新しい名称「北加伊道」を含む6つの案を政府に提出し、この案をもとに政府は「北海道」に決定したとされています。

アイヌ民族を指す古い言葉が「カイ」である話を古老から聞いたことに由来する「北加伊道」という名前には、北のアイヌ民族が暮らす広い大地であるという、先住民族であるアイヌの人々を尊重する思いが込められています。